

名古屋女子大学 和文庫本『土佐日記(解)』翻刻(4)

辻 和良

凡例

- 一 漢字、仮名の区別は底本のままとした。
- 一 原則として、漢字の異体文字の類は通行の文字に改めた。
- 一 誤写と判断したものについては、該当文字の傍らに正しいと判断した文字を()に入れて記した。
- 一 割注は◇に入れて記した。
- 一 本文中には、数箇所朱書き部文がある。それについては、最後に補注の形で掲げた。
- 一 本文中の句読点は、読解の便宜を考えてすべて私に施したものである。
- 一 注釈部分は、二字下げが字万伎註、三字下げが秋成増補と考えられる註、五字下げが頭注である。
- 一 頭注について。「」でくくったものが秋成増補と考えられる註、何も付いていないものが字万伎の付したと考えられる註である。猶、本文の該当箇所後に頭注を入れたために、本文との間に丁数のずれが生じたところがある。その場合には、頭注部分にも丁数を記した。

なかめは、長目と書て物おもひありて打守りある時の事なる故、もの思ひある時ならてはいはぬ詞也。唯見る事とおもふへからすつ、と云詞は、つとは一ツ二ツと物を分つ詞なり。なかめつ、といふは、先なかめつところへて、さてそれをかさねてなかめつく、と云へきを、下のつの詞はかりかさねて、上へかゝる古語の例なり

「いよく」と云へきをいよ、といひ、しとくといふをしと、うらくをうら、の類、挙てかそふへからす。つ、のみ事むつかしく云は、かへりて愚也。」

○大人いふ、さる意なるかうつり来ては、物を長く見る事と成ぬる也。こ、は、おもしろき浜つたひのけしきを見つ、くるをなかめともいふへき也。後の人の遠く見る事にまていふは、語の本うしなへり。大人云、乍の字、つ、とよむ事いかにおもふに、是は全の字をみたかへて、乍と書るなるへし。全は、事物を重ねる也。同の字と一義也。さて事物をかさぬる故に、つ、と云義訓には用ゐたらめ

ゆくりなく風ふきてこけともくしりへしそきてほとくしく打はめつへし

ゆくりなくは、日本紀に不意の字を用う。思ひかけなきといふに同し。ほとくしは、はてくしくと云(17・オ)に同義也。遠江の国の方言に、季子をほてのこと云よしなり。こ、は、危殆の字の意にて、ほとんど、云もおなし言也

しりへしそきにしそきて、万葉に、あきなひの山にひこ舟のしりひかすもよとヨメルト同ク、後へ退キカチニナルナリ
かちとりのいはくこの墨の江のめう神はれいの神そかしほしき物おはすらん

例の神そとは、いつもほしき物おはすれば、浪風を起したまふと也。住の江の大神は、伊邪奈伎のよもつ国にけかれたまひて、日向の小戸の橘の櫛原にて身褻せさせたまへる時に化生したまひし大神なり。日本紀に云、底筒男命、中筒男命(17・ウ)、表筒男命、是即住吉大神矣(今の本に明神と有は、いふかしき也)

「今の本明神と有。明神とは、いにしへはあまつ神、あらみ神ともよみて、今顕におはします天皇申奉る也。貫之の頃、住吉の明神とは云へからず。書誤る也。余名ある神をは名神と書る事、式にみゆ。さらは、めう神と書たるにて名神の義なるを、後に明神と書かへるもの也。今考るに、神霊の神を明神と書し事、古書にかつて見へす。延(17ウ)喜式に名神の字はあれとも、明神の字なし。然に、弘法の書たると云神社の額に明神の文字あり。其比既に神社の事はかりに用ゐしか、弘法の書と云も後の人の偽事か、知へからず」

とは今めてものか
神も今の世めきて物ほしくしたまふかと也

さてぬさをたいまつりたまへといふ

正本云
大神ノ、イカテ今ノ世ノ人心メキテ余オハスラント云ヘト、
械士ノハヤク幣タテマツリタマヘテ責キコユルナリ

いふにしたかひてぬさたいまつるかくたいまつれとも波風やまてい
やふきにいやたちにかせなみのあやうければかちとり又いはくぬさ
にはみこ、ろのいかねは御ふねもゆかぬなりなほうれしと思ひたふ
へきものたいまつりたまへといふ

正本云
神慮ニ足ハセタマフヘキ物ヲ奉幣シタマヘトス、ムル也(18
・オ)

又いふにしたかひていか、はせんとてまなここそふたつあれた、ひ
とつある鏡をたいまつるとて海にうちぬれはいとくちをしされ
はうちつけにうみはか、みのことなりぬれはある人のよめる歌
ちはやふる神のこ、ろのある、海にかみをいれてかつみつるかな
鏡を海に入て、即神の御心を見たれば且とはいふなるへし
いたくすみの江のわすれくさきしのひめ松などいふ神にはあらずか
し(18・ウ)

いたくは、痛みなけく也。此御神は、わすれ草岸の姫松などや
うの大かたの草木の霊をさす神にはあらしと也。草も木も神也
といふ神代のこ、ろによりてなるへし

住江ノワスレ草ノコト、イフカシムヘキ旨アレト、コ、ニ言
長ケレハ云ハス

めもうつらうつら、か、みに神の心をこそみつれ

うつらうつらは、現に鏡を入れて、神の御心のか、るを見しとなり
大人云、此一段ことにあやしきもの語也。是に似た
る事、他の書にはかつて見えぬもて現にこの日記に
ある事を云人もなく、ひたふるは今和哥の神なり

とのみとりはやし奉る也けり。是につきても日本紀の神功の御卷を思ふに皇后御みつから齋の宮に神主とならせたまひて、さいつか先王に教給ふ神は（19オ）誰その神そと問せたまふ時に、います神又事代神につひて住吉の三神の御告也と答たまひぬ。さて、神の教のまゝに西の賊の国を得たまへる事、誰も知たる物語也。さるは、こゝにも、ちはやふる神のころのある、海にとよみけんかごとく、いといちはやひたる大神なる事はしるかりけり。さてこゝに、例の神そかし、ほしき物おはすらんと舟師等の云、昔より語伝へたる事も有ならん。物たに奉れば、舟はつゝ、かなくゆくこそまのあたりなれば、舟師等はかくいへるなりけり。是をはしめて聞つる人々は、今の世の人心めきたる事いかておはすらんと、うたかひあへれと、舟にあるかきりは、かち所にしたかふへければ、この宝とせし鏡を投入しに、はた波（19ウ）風の静まりぬる⁽³⁾はいかにとかしこみあへる也。哥よむ人は、岸の姫松わすれ草などおひ出て、いとやさしき名ところにしつもりませる神とおもはれぬよなど、め、しく書なしたる文にはあらぬか。此ころいまた和哥の神と申はやせる事なかりき。あらは、この文には必いひ出へきものぞ。これらも荷田東丸の説のごとく、いせ物語のそらことに大神現顕したまひて、哥よみかはしたまふをよん所として、後に津守氏の人など、言の葉を守らせる神也とはいひなしぬらん。彼氏人代々哥の上手の出しは、神の

守りなど、いひはやせしものならんといふ事、前学達の論也。今の世の哥よみ達の聞をおとるかさんとはあらて、いにしへによりて此事は云也けり（20オ）

かちとりのこゝろは神のみこゝろなりけり

械師カ詞ノ験ナルヲ云ナリ。此一段カク験ヲ見ツレトモ、貫之ノ心ニハイフカリシタマヒ、カ、ルコトハアシキ神ノシワサニテコソアレ、今現ニシルシアリトモ、住江ノ神ノナシマセルワサニヤアラシ。海ニハサマ／＼ノ物住テ、ソレラカナセルナラント疑ノ心ヲ抱キテ書シタルカト思ユ（19・オ）

六日みをつくしのほとよりいててなにはつきて川しりに入る

みをつくしの水脈津申也。続日本紀に、難波津に始て漣標を立る、有。川尻は、撰津国也（今の川口）

又云はやく茅沼より北、住の江は津の国也。今は、河口と呼。舟人よりしかいひならはせしなるへし。

難波人より河後と呼へき事なり。

みな人々おんなおきなひたひにてをあてよろこふこと二つなし

おんなは老女なり。和名抄、嫗（於無奈）おいをみなの中略也。おきなは、翁也。こゝは老女も老男もと云也。ひたひに手をあつるは、或云いたう物をよろこふ時なすわざなりと。もろこしの擲掬すると有も同しと（19・ウ）

かの舟酔のあはちのしまのおほいこみやちかくなりぬといふをよろこひてふなそこよりかしらをもたけてかくそいへる

前に淡路のたうめといひし人の名なるへし。たうめ一人こゝちあしみしてとありし故、こゝには、彼舟多ひのとは書る也

いつしかといふせかりつるなにはかた声こきそけてみふねきにけり

いふせかりつる芦の中を漕さりのきて也

又云いふせかりつるは、いつしかとおほつかなかりつる難波かたなりしをと云。芦間こきそけては、こ、のみなどのけしきにて、芦原のいふせきにはあらし

いとおもひのほかなる人のいへれは人々あやしかる

哥ノヨロシケレハナリ(20・オ)

これかなかにこ、ちなやむふなきみいたくめて、ふなゑひしたまへりしみかほにはにすぞあるかなといひける

貫之ノ誠ニイタク感常アリシナリ

七日けふ川しりにふね入たちてこきのほるに川の水ひてなやみわつらふ舟ののほることいとかたしか、るあひたにふなきみの病者もとよりこち／＼しき人にてかうやうのことさらにしらすりけり

こち／＼しきは、骨々しき也。物に気もつかず、きす／＼なる意也

か、れともあはちのたうめの哥にめてみやこほり(20・ウ)にもやあらんからくしてあやしきうたひねりいたせるそのうたきときては川のほり江の水をあさみふねも我身もなつむけふかな

来り／＼てはにて、からくしてきてはと云也。又川のほる江の水をあさみと心得へし(堀江川ナレハタ、例語シテ云ル歟)舟も我身もとは、病者なれば也(次々病ヲスレハヨメルナルヘシト)

大人云、堀江川を河のほり江とよみたるは、歌の巧なり。仁徳紀十一年十月堀宮北之郊原引南水以入西海因以号其水曰堀江とみゆ。今を以てみれば、大城に東に南より来る小渠有。是故大和川也。昔は、大

(四)

和河内の水を合て流来⁴⁾る大河なりしを、寛永の頃川たかひを課て、河内の国中を堀さき、直に西を指て住吉(20ウ)の南、茅沼の堺の津の北より西海に入しむ。これ難波の水門に土砂の落来るを防くか為の困利也。彼故流の小渠は今に東西の岸のかたち残たるに其大河なりしと思ひはからる。又十四年十一月に為橋於猪甘津号其処曰小橋とみゆ。此小橋とはいふかしき事なり。まのあたり猪甘野村は、東岸に名をと、め、小橋は西岸に今も呼地名也。其間の地○直は大河なりし事明らかなるに、そのわたりせんは、小橋とはよふへからず。これはた大橋なりけんおはしと略きてとなへしより、をはしと音の同じきに仮名つかひの法則にかゝりて小橋の字にあらためし後人のしわざかとも(21オ)云へし。横野堤と云も、猪甘野のわたりより南を指ていへり。北小橋村のあたりこそ、いにしへ高津の宮の古堵なるへく、又四天王寺の南辺に今故堀江口と云里名有。是も故の堀江口とは聞ゆれと、地図と古書とを思ひあはするにかなはず。是は里の名の乱れたる世に南に移たるなるへし。此等の事この記には用なけれと我おひ出し国のことなればむたことをもいふなりけり。

⁶⁾これはやまひをすればよめるなるへしひと歌にことあかねはいまひとつとくとおもふ舟なやますは我ために水のこ、ろのあさきなるへし(21・オ)

とくと思ふは都へ也。舟なやますは、水の浅き故也
昔モ此川筋ノ所々浅リテ舟ノ行カタキヲ見ルヘシ

このうたはみやこちかくなりぬるよろこひにたえずしていへるなるへしあはちのこの哥におとれりねたきいほさらましものをとくやしかるうちによるになりねに
けり

八日なほ川のほとりになつみてとりかひのみまきといふ所にと、ま

なつむは、行なつむにてと、こほる也。万葉に、降雪をこ、になつみてまありこし、其外かた／＼に有。今の俗語に茶をのみてなつむといふは、古語にかな(21・ウ)えり

又云、鳥飼の郷、今もあり。今道一里許一郷也。河後に来てこ、まで陸路には五里余り(21ウ)なるへし。舟路にてそのかみいかはかりの程にやるへからす。されと川の浅きになつむといふにても、今を以て思ふに、舟のす、みかたきをしらる。今は水をよくとほすのみか浪路も遠からすして、舟のゆきかひ、そのかみにまさるへし。鳥飼の御牧といふは、こ、も御牧場なりしにや

とりかひのみまきといふ所にとまる
鳥飼と書也

大人云、今の地図にては、たえて思ひはかりかたし。鳥飼より西南に江口の郷有。是はいにしへは、舟泊にてあそひなども名高きか河またをりし事、かた／＼ものにもみゆ。しかれは、海船もこ、まては多く来りしなるへし。されと其江口は、西成郡に属す。鳥飼は、嶋下郡に属して、この紀行には、前後(22オ)したれば、そこと定かたし。た、郷名のわたの

泊のわかれの所といふか、かなへらんやうなれば、いふのみ。すへて郷名は、世の乱などに、かなたこなたうつりまとふ事のありは、名はいにしへにて、地はしからぬか多し。こ、に難波は、海国にて、昔より国の利のために、こ、かしこ堀たかへて、水を通し堤をも築改めらるれば、郡も大小のたかひとなり、里をもうつしかへらる、事あまた度なりしかは、今の国かたにては、中々にいはぬそよきを、思ふにまかせてかいつけぬ(22ウ)

こよひふなきみれいのやまひおこりていたくなやむ

コノフナキミハ、サキニアハチノタウメノウタヲネタカリシ君ニテ、貫之ノ妻ナルヘシ

ある人あさらかなるものもてきたりよねしてかへりことすをとこもひそかにいふなりいひなしてもつるとや

今の本につゝるとあり。つゝるの字の誤なるへし。飯穂は、米をもて魚を釣也。鮮魚の代りに米をやりたる故に米にてうを、釣たるとはと、ひそかに云をき、てたはふれに書る也(22・オ)

かうやうの事とところ／＼あり
ありしかと略きて書さりし也

けふせちみすれはいをもちあす
せちみの事すてにいひつ
九日こ、ろもとなさにあけぬ

かりに夜の明るなり

或人ハ舟ノ行ヤラテ心モトナサニト云ナルヘシト云リ。カリニ夜ノ明ルトアルハ、写アヤマレルカ、詞足ハネハ聞エス。此心モトナサハ、前日舟君例ノ病シテト云ヲウケテ、心持ア

シケレハ、心モトナサニ夜ノ明タルナリト云ナルヘシ。心もとなさに、舟君の病にふせるをうけて云か聞とりかたしかくふねをひきつゝのほれとも

今の本には、から舟をと有。かくの誤なるへし。如此舟を引つゝなるへし (22・ウ)

川の水なければるさりにるさるこのあひたにわたのとまりのあかれの所といふところあり

退散を、まかてあかると云。別る、所なるへし

我津国ニ生レタレハ、此ワタリノ地利大カタアキラメタレト、此鳥飼ヨリ東北ノ方ニ今ハサルヘキ所ナシ。コ、ニワタノ泊トアレハ、海船ノ泊ス所ナルヘシ。此川筋イニシヘノマ、ナラネハ、今考ル所ナシアカレノ所ハ、別ノ処也

よねいをなとこへははおなひつ

おこなひつは、こなたよりいひやりし事をかなたにてなし行ふといふ事にて、贈せつといふにをなし

此ワタノ泊ノ別レノ処ニ来テハ、米ヤ魚ナト乞ヘハ行ヒツト云ハ、コ、ニテハ海船ノヨセクル処ニテ、コレヨリハ、都ニ入ヘキ悦ヒヤスル処ナリ。仍テ、米魚ナトヲ舟師等ノ乞ニマカセテ、下行セルナルヘシ。川ノ内ナレト、コ、マテヲ海路トセン。当今ノ定メナトアリタルナルヘシ。

大人云、此わたの泊の別れの処に来ては、必つ、かなかりし事をよろこひの酒宴などとする事とみゆ。よて、米や魚を乞へは行ひつとは、下行と今もいふ義にて其事を下し行ふ也。こ、は、河の内なれと川しりよりくると、西の海より入来ると二岐に別れ (23オ) て、こ、にて打あふ処なるへし。されは、江口

といふ字はあたれり。

かくてふねひきのほるになきさのゐんといふ所を (23オ) みつ、ゆく

渚の院、河内の国也。今牧方といふ所の北也

川ノ東ハ河内国、西ハコノアタリモ撰津国ナリ

大人云、なきさと云郷、川東に有て、河内の国なり。

西の岸は津の国也 (23ウ)

その院むかしをおもひやりてみれば

此おもひやるは、おもひはかりにて、後の詞也

おもしろかりけり所なりしりへなる岡には松の木ともあり中の庭には梅の花さけりこ、に

こ、に於是ニテ、コ、ニオキテノ義ナリ

人々のいはくこれむかし名たかくきこえたる処なり故これたかのみこの御ともに故あり原のなりひらの中将の世のなかにたえて桜のさかさらは春のこ、ろは (23・ウ) のとけからましと云うたよめるところなりけり

惟喬親王は、文徳第一の皇子、母紀静子、名虎の女。故の字は、

亡人を云也。業平朝臣は、阿保親王第五子、母は伊登内親王。

元慶元年正月十五日、任左兵衛中将。さかさらは、古今集には、なかりせはと有。伊勢ものかたり同し

いま興ある人ところに似たる哥よめり

所に似あひたる也 (興アル人トハ、人々ノ中ニスクレテ興セル人となり、即紀氏ナルヘシ)

ちよへたる松にはあれといにしへのこゑのさむさはかはらさりけり声のさむさはさひしくすまましき也

或人云、昔ニカハリテ院ノ荒タルナト、思ヤルヘシト。イニ

シヘノ声ノサムサハ、巧得テメツラナリ（24・オ）
またある人のよめる

きみこひて世を降るやとの梅の花むかしの香にそなほにほひけると
いひつゝそ

君は惟喬のみこを指也。世をふる宿は、渚の院也

みやこのちかつくをよろこひつゝ、そのほる人々のなかにみやこより
くたりしときにみな人の子ともなかりきいたれりし国にて子うめる
ものともありあへるみな人舟のとまる処に子をいたきつゝ、おりのほ
りすこれを見てむかしの子のは、かなしきにたえずして

なかりしもありつゝ、かへる人の子をありしもなくしてくるかかなしき
といひてそなきけるち、もこれを（24・ウ）きゝていかゝ、あらんか
うやうのことも

かくのこときといふを、なたらかにいふ也

うたこのむとてあるにもあらざるへし

哥このむとてよむにもあらず。思ひに堪ぬ時のわさ也となり

もろこしもこゝもおもふことにたへぬときのわさとか

文言ヲ好ム世トナリテハ、仮託ノミノ詠嘆ヲ玩ヘルヨリ、カ
クモワサノコトワリタルナリ。

こよひ宇土野といふところにとまる

宇土野ハ、川ノ西ニテ撰津国ナリ。川尻ヨリコゝ、フタトマ
リスルコト、イニシヘハ、コノ川ノ波路遠カリシト見ユ

十日さはることありてのほらす

十一日あめいさゝかふりてやみぬかくてさしのほるにひか（25・オ）
しのかたに山のよこほれるをみて人にとへはやはたのみやといふこ
れをきゝて人々おかみたてまつる

きゝて、或本によろこひてと有。八幡宮は、応神天皇也。初め

肥後国菱形の池の辺におはしけるを、欽明天皇の御時神託によ
りて、豊前の国宇左の宮に迂し奉り、其後、清和天皇の御時、
大和の大安寺の僧行教夢を感じ奉りて、山城国男山にうつし奉
るへきよしを奏聞せしによりて、すなはち御祠をたてさせ給へ
り

山さきのはしみうれしきことかきりなし

拾芥抄、大橋の部に云、山崎今大渡敷とあり

川ノ東ニ、今ハ橋本ト云里アリ。山崎ノ橋コゝニカケルナリ

ヘシ。舟ワタシ有。是ヲ大ワタリト云（25・ウ）

こゝに相応寺のほとりに

三代実録に、山城の国、乙訓郡相応寺者、元是漁商比屋之地也。

往年権僧正壹演、泛水觀行。橋頭遭天暑熱、上岸風涼。有一老

嫗。避舍献地。壹演便在其中。聊作檀法、鏝平地中、得旧仏像。

因縁相応、靈瑞頻現。太政大臣、歎其希有、奏建道場。即、発

工夫、勿備輪、遂定寺名、以為相応。宜賜四履永為寺堺。東至

橋道、南至河崖、西至作山、北至大路、云々

しはし舟をとゝめてとかくさたむることあり

京ニ入用意ナリ。彼是ト定ムルナルヘシ。

此てらのさしのほとりに柳おほくありある人此柳の（26・オ）かけ

の川のそこにうつれるをみてよめるうた

さゝれ波よするあやをは青柳の影の糸しておるかそそみゆ

十二日やまさきにとまれり

山崎ハ、当時ノ舟泊ナルヘシ。催馬楽ニ山サキノ筑紫津ト云

ル章モ見エタリ。筑紫舟ノコゝマテ入ル故ニ云カシラス

十三日なほやまさきに

十四日あめふるけふ車みやこへてりにやる

昔は西国に行人も、京に上る人も、山崎より舟にのりあかりせし事、古今集、大和物語等に見ゆ

十五日けふくるまゐてきたり

車をひきゐてきたるなり (26・ウ)

舟のむつかしさに舟より人の家にうつる

むつかしとは、むさく／＼とせし事なり

今俗ニ云、ムサクロシキト云詞ナリ

此人の家よろこへるやうにてあるししたり

あるししたりは、饗応する也

貫之ノ宿ラレシヲ、家ノ内皆挙リテ悦ヘルヤウナルヲ、家ヨ

ロコヘルト云歟

大人云、此人の家とは、家のうちの人こそりて、貫之のやとれるをよろこふといふか、詞たらざる様なるは、うつしもらせしにや

こ、のあるしの又あるしのよきをみるにうたて

おもほゆ

此あるしは家主也。又のあるしは、饗応なり。うたては、物のかさなり過る義也。此主のよくあへしらふに、又もてなしのあへのよきをみるに、あまりしきまておほ (27・オ) ゆると也。

家の人の出入までの事をいへるにてもおもへ

又云此あるしは、男あるしなるへし。又のあるしとは、女あるしなるへし。又の下にの脱せしとみゆ。

男あるしの人からよきに、又の女あるしさへよき人なる (27オ) をみるに、舟よりあかりたる人々のつ、ましからぬもて、恥かしくうたてしといふなるへし

(27ウ)

いへの人のいていりにくけならすいや、かなり

いや、かは、うや／＼しく礼儀正しきなり

京近クテ、今容義進退ノ宜シキヲ含メテ書ルナルヘシ。

十六日けふようさつかたみやこへのほるついでにみれば

タツケテ京へ入ナト用意アルハ、女兒オホク波路ノツカレニ

テ、ミタリカハシキヲ人目ツ、シミテナルヘシ

やまさきのこひつのゑも

ちひさき櫃めくものに絵を書て、童の玩物に売しにや

まかりのおほちのかたもかはらさりけり

和名抄、櫻餅形如藤葛者也 (和名、万加利) おほちは、大餅な

るへし。或人の抄の庭訓に、伏見煎餅と云物なり。山崎より

(27ウ) ほらの貝の形なる餅を油上にして、京へ出す也とそ

一本二山崎のたなゝる小櫃の絵も又まかりのほらのかたもト

アルモト有。此おほち、大餅ナリト云ナリト云ンモ聞馴又詞

也 (へうし、ほらし字形紛レヤスシ) 一本ノほらのかたも採

ヘキカ

うる人のこゝろをそしらぬとそいふなる

カクセルハ、人ノ心ノタノマレカタキヲ云ニテ、下ノ文辞ニ

アハセミルヘキ事アル。其編ヲコ、ニオコセシニヤ

大人云、かくいへるは、此山崎の里人の事にはあらで、下に家あつけたる隣の人の心のみたるかひなきをいふへき端を、こゝにおこせし也。上衆の筆

はかゝる事多し (28オ)

かくて京へいくに嶋坂にてひとあるししたり

嶋坂向日神社の南山崎の道なるとそ

山崎ヨリコ、マテ道ノ程幾ホトモアラス。サルハ、此一アル

シトハ、一夜ヤトルニハアラテ、都ノ人ノコ、マテ坂迎ヘニ
来テ、饗スルナルヘシ。夜ニナリテ、都入セント思ヘハ、急
モセヌト云ニ見ルヘシ

かならずしもあるましきわさ也

こは下につく詞也。任国におもむく時は、うとかりし(28・オ)

人も、今かへり来るとなれば、追従のけしきもおのつから人々
にあるを、よからぬわさなりと、かめたる也

たちてゆきしときよりはくるときそ人はとかくありけるこれにもか
へりことすよるになしてみやこにいらんと思へはいそきしもせぬほ
とに月いてぬかつら川月のあかきにそわたる人々のいは、此川あす
か川にあらされはふちせさらにかはらさりけりといひてある人のよ
めるうた

久かたの月におひたるかつら川そこなるかけもかわらさりけりまた
あるひとのいへる

あま雲のはるかなりつるかづら川袖をひて、もわたりぬるかな(28
・ウ)

天雲よりいひくたしたれば、右の哥のことく、はるかなる月の
桂を名におへる川に袖をひたして渡るとなり

又ある人のよめる

かつら川我こゝろにもかよはねとおなしふかさになかるへらなり

深さとは、京にかへりし悦ひのふかさなや。又、悦ひのふかけ
れば、川のなかれもおなしふかさなる、となるへし

みやこのうれしきあまりにうたもあまりそおほかる夜ふけてところ
くも見えすみやこにいらちちてうれしう家にいたりて門にいるに
月あかけれはいとよく(29・オ)ありさまみゆき、しよりもまして
いふかひなくそこほれやふれたる家をあつたりつる人のこゝろも

あれたるなりけりなにかきこそあれひとついへのやうなれはのそみ
てあつかれるなり

隣家の賤士也。あなたより望みて預かりし也

大人云、こゝさまざまことに空屋のさまを妙にうつし
出たり

されはたよりことにものはたえすえさせたるこよひかゝること、こ
はたかにもいはせず

かくあれたること、家人らに声高にいはせず隣の人の聞をとて、
心つかひする也

いとつらく見ゆれば(今の本には、見ゆれと、あり)

あつかりし人のしかたなり(29・ウ)
こころさしはせんとす

何事モ心ツカヌサマニテ返報ハセントス也。イト恥ヲクスル
ヲ見テソ、カク心ツカヒシタマヘル、紀氏ノ人カラナリ

さて池めいてくほまり水つける所あり辺に松もありき五とせむとせ
のうちに千年や過にけんかたえはなく成にけりいまおひたるそまし
れるおほかたみなあれたればあはれとそ人々いふこの家にてうまれ
しをんな子のもろともにかへらねはいか、はかなしき

いか、はかなしきハ、イカハカリ悲シキトミツカラノウヘヲ
云ナリ

ふな人もみな子たかりての、しる

舟人もは、舟に乗て来りし人なるへし。子たかりては、たきて
也。加利の約き也。(或本に、子いたきてと有)(30・オ)

舟人ハ、舟ニ乗テ来リシ人ナルヘシト云注、猶聞エカタシ。
カク舟人ト云テハ一ワタリ舟士等ノ事ニ聞ナサルレト、舟ヨ
リ上リテ来リシ人ト云義ニヤ。此記ノ文様アマリニ、言ヲ略

キタルヤウナルカ所々多ケレハコ、モル意得テアンカ。子タカリテハ、寐タカリテ歎ナト云人モアリケナレト、一本ニ子イタキテトアルヲ見合サヌ私言ナレハ、論ニモ足ヌコト也

大人云、舟人といひて一わたりに子等のうへに聞なざる、也。此記の文勢あまりに言を略きて心得かたき所々多し(30才)

か、るうちに猶かなしきにたえずしてひそかにこゝろしれる人といへりけるうた

紀氏夫婦ノコ、コナルヘシ

うまれしもかへらぬものをわかやとにこまつのあるをみるかなしさとそいへる

さきのことには、今生たるもまされるといふをあはせこゝろうへし

なほあかすやあるらんまたかくなん(言・ウ)

見し人をまつのちとせに見ましかはとほかなしきわかれせましや遠き別れ、死別也

○上ニ補注アリ

わすれかたくちをしき事おほかれとえつくさすとまれかうまれとくやりてん

破捨てんと也。人に見すへき物にあらすと也

○上ニ補注アリ

大人云、彼はしめにいひし大伴の師旅人の君の還入故郷家作歌三首、

人もなきむなしき家は夢まくら旅にまさりて苦しかりけり

妹としてふたりつくりし我家は木高くしけく成にけ

(二〇)

るかも
わきもこかうゑし梅の木みることに心むせつ、なみ
たしなかる

これは、妻をつくしにて失ひし也。こゝは土左にてかなし子をむなしくせし也。(31才) 似たるなけきなれば、昔を思ひ出しておのつからならひしやうのみゆるなり。ならへりしといふとも、紀氏をおとしむるにはあらで、いにしへを見あきらめたる人のこゝろ也。

又云、彼おもてをますら男にして、め、しきを恥とするそのかみの人こゝろ也。子をいとをしとおもふこゝろは、いかてめ、しといはん。世のことわりとは、これらをこそ(31ウ)

明和五のとしふ月廿日に、書はてぬ。このふみの注か、むと三とせ四とせのさきおもひたちけるに、いと、りみたりし事も打つ、きて、えなんその(31・オ) ことにおよはさりけるを、ことしみやこに来て大城守るいとま、西の小屋にしてふてをおこし、やかておはりぬ。なほかうかへあきらめつへし。ふちはらの宇万伎(31・ウ)

《完》

《補注》

- (1) 「よ」を見せ消ち、右傍に「よ」。(汚損)
- (2) 「を」を見せ消ち、右傍に「心」。
- (3) 「しに」を見せ消ち、右傍に「ぬる」。
- (4) 「昔」を見せ消ち、右傍に「流」。

- (5) 「猪」を見せ消ち、右傍に「猪」。(汚損)
- (6) 「淡路のこれこは巨子を云。女の名に何こと云は御の義にて、あかめいふより出て通称となれり」
- (7) 「正本下ニアリ
古事記仲哀天皇記ニ息長帯日売命拔取御裳之糸以飯穂為餌釣其河之年魚」

(付記) 資料の閲覧、及び翻刻の許可を下さった本学図書館に感謝致します。猶、本稿は、平成九年度名古屋女子大学共通研究費の助成の成果の一部である。